

# 南を目指した佐久の弥生人

—佐久から甲府盆地、そして太平洋沿岸平野部へ—

小 山 岳 夫

山梨県考古学協会誌 第25号 抜刷

2018.5

# 南を目指した佐久の弥生人

—佐久から甲府盆地、そして太平洋沿岸平野部へ—

小 山 岳 夫

## 1 はじめに

本誌に昨年投稿した先行論文では信州長野県佐久盆地北部固有と考えられる弥生時代後期前葉の仮称「佐久系箱清水式」土器（以後「佐久系箱清水式」という。）が甲斐山梨県甲府盆地と信州長野県茅野地域にも主体的に分布していること、逆に甲府盆地、茅野地域の土器が佐久盆地へはもたらされていないことなどを根拠に、後期前葉という限定された時期に佐久盆地から甲府盆地、茅野地域への南を目指した集団移住があった可能性を指摘した<sup>(1)</sup>。

その後、東日本南部一帯の弥生時代中期後葉～後期、古墳時代前期の竪穴住居内の炉を概観した結果、地床炉主体のなかにあって長野県の炉は土器使用炉や石囲炉など特徴的な炉を設置する地域であり、佐久盆地にも土器敷炉という「佐久系」の名が冠せられる固有の炉が存在すること、「佐久系」土器敷炉が甲府盆地や茅野地域にも高い割合で分布していることを明らかにした<sup>(2)</sup>。

本稿の目的の一つは土器様相のみに頼っていた佐久盆地から南への移住の想定を炉の類似性も重ね合わせることで、先行論文の仮説を補強することにある。

甲府盆地に至った佐久系箱清水式土器は、後期前葉段階で在地的変容を遂げ金の尾式土器が成立する。その後の資料調査で金の尾式と見られる中部高地型櫛描文をもつ土器は、後期前葉の駿河湾沿岸静清平野では登呂式土器や相模湾沿岸足柄平野・大磯丘陵・相模平野では菊川式土器が主体を占める中にあって客体的に混在することが判明した。

本稿のもう一つの目的はその調査結果を分析して、佐久盆地に端を発する弥生文化が南を目指して太平洋沿岸にまで至った経緯を追求することにある。

## 2 「佐久系箱清水式」土器と他地域の併行関係

信州長野県長野盆地の箱清水式をはじめ、同佐久盆地の佐久系箱清水式、甲斐山梨県の金の尾式、上野群馬県の樽式、北武蔵埼玉県北西部比企丘陵の岩鼻式、南武蔵東京都・神奈川県が多摩丘陵に分布する朝光寺原式は、中部高地型櫛描文を施す甕を共有するため比較検討しやすく、併行関係も想定しやすい。参考文献を勘案して私の考えで併行関係を想定した結果が表1になる。

また、今回研究の対象地域としている駿河静岡県静清平野や相模神奈川県足柄平野・大磯丘陵・相模平野にも前述のように弥生後期前葉に中部高地型櫛描文を施す信州系の甕が客体的に分布することから併行関係を検討した。この地域では後期後葉になると信州系の土器は見られなくなる。これは山梨県甲府盆地の後期後葉の金の尾式土器に見られる信州系の影響が極端に薄くなり、菊川式土器など東海系土器の色彩が色濃くなる現象と相関がある。

佐久系箱清水式土器が、佐久盆地北部で顕在化するのは後期前葉の後半期である。その特徴は壺の頸部に鋭利な刃物で切り付けたような篋描矢羽状文が施される点にあり、古墳時代前期前葉まで継続して施文される。もう一点、甕の櫛描横羽状は一段階遅れて後期中葉になってから確立され、古墳時代前期中葉まで継続する。箱清水式土器の嫡流が分布する長野盆地では、壺の篋描矢羽状文・甕の櫛描横羽状文は後期中葉以降用いられない。佐久盆地北部と長野盆地の土器様式の発展の差異については図1に示した。

後期前葉で壺に篋描矢羽状文を施文する地域は長野・佐久・甲府盆地、茅野市域である。先稿ではこれを比較して、佐久・甲府・茅野三地域に文様帯幅や壺の形態に類似性・共通性が強いと判断、佐久系箱清水式集団の佐久から甲府・茅野への南下を想定した。

表 1 弥生時代後期土器編年併行関係表（信州系と静岡を対比）

弥生時代後期土器編年所行関係表（信州系と静岡系対比）																			
時期	群馬県 樽式	群馬県 富岡市 南蛇井増 光寺遺跡	埼玉県 岩鼻式	東京都 神奈川県 朝光寺原 式	山梨県 金の尾式	静岡県			長野県										
						東遠江 菊川式	西駿河 登呂式	東駿河 雌鹿塚 式	佐久 盆地	長野 盆地 南部	長野 盆地 北部	諏訪湖 南部 茅野市	松本 盆地	上伊那・ 諏訪湖 北部	（橋原）	上伊那 南部	飯田 盆地		
弥生後期	前葉	1期	1期 （若狭徹・飯島克己 1980）	1期 （柿沼 2014）	Ⅰ式	1段階 金の尾Ⅰ式	二之宮Ⅰ	登呂Ⅰb	—	—	1段階	（不明）	1	（山下誠一 2001）	ⅠⅡ	（箕輪）	Ⅳ段階		
							菊ⅠⅡ	登呂ⅠⅠ	雌鹿塚ⅠⅠ	—	2段階		2古					ⅠⅡ	Ⅴ段階
							菊ⅠⅢ	登呂ⅠⅡ	ⅠⅡ	（篠原 2002）	3段階		2新					Ⅰ	Ⅵ段階
	中葉	2期	1期 （大木紳一郎 1997）	Ⅱ新式	1段階 金の尾Ⅱ式	菊ⅡⅢ	登呂ⅡⅠ	ⅠⅢ	（小山岳夫 2016）	4段階	（土屋 積 1997）	Ⅲ新	（高林重水 1981）	Ⅱ	Ⅲ	Ⅶ段階			
						—	—	—	—	—		—					—	—	
						菊ⅡⅣ	登呂ⅡⅡ	ⅠⅣ	—	—		—					—	—	
	後葉	3期	2期 3期古 3期新	Ⅲ式	2段階	—	—	—	Ⅳ期古	5段階	—	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅷ段階			
						—	—	—	—	—		—					—	—	
						—	—	—	—	—		—					—	—	
						—	—	—	—	—		—					—	—	

樽式

岩鼻式  
朝光寺原式

金の尾式

箱清水式

橋原式

多段帯状  
施文系～  
中島式

樽式

岩鼻式  
朝光寺  
原式

金の尾式

箱清水式

橋原式

多段帯状  
施文系～  
中島式

しかし、後期前葉には長野盆地でも篋描矢羽状文が存在していることは事実で、これがはるばる甲府・茅野へもたらされた可能性も否定できない。今回は土器一辺倒でなく、炉の側面からも佐久・甲府・茅野三地域の関係性を考えてみる。

また、先稿では佐久系箱清水式集団の南下は後期前葉という限られた時期であると考えた。その根拠は後期中葉から発達する甕の櫛描横羽状文が、甲府・茅野両地域でほとんど見られないことが根拠であった。

### 3 弥生時代の炉概観

先稿<sup>(3)</sup>を参考にして信州を中心とした弥生時代の炉の時期ごとの分布状況を概観する（図2～7）。

#### 中期後葉栗林2式新段階

それまで地床炉主体であった信州弥生時代の炉に地殻変動が起きる。長野県の南信下伊那盆地では「南信系」埋甕炉が成立、「普遍系」地床炉を凌駕して全体の3分の2を占める炉に発展する。この影響は、北に隣接する上伊那盆地、さらには松本盆地南部にまで及び両地域とも3割が埋甕炉となる。注目すべきは下伊那盆地から遠方の佐久盆地・長野盆地でも少数の埋甕炉が見つかることで、筆者はこの現象を長野盆地の妙徳山産出の緑色岩類で制作された榎田産磨製石斧の広域流通に伴う文物往来の落しものとみた。

佐久盆地では埋甕炉の参入を受け、これを変容させて栗林2式中段階に地域独自の「佐久系」土器敷炉が完成する。これが栗林2式新段階には佐久盆地内では増加し、長野では松原遺跡、松本南部では宮淵本村遺跡などの各地域の拠点集落でもその存在が確認されている。

同じ時期、信州中部の諏訪・松本南部・下伊那・佐久盆地では縄文時代晩期の伝統を引き継ぐ「中部系」石

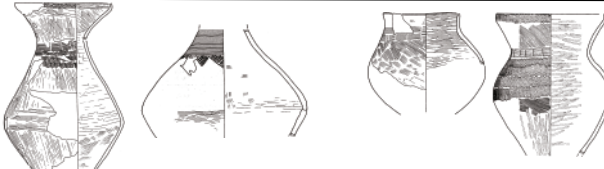
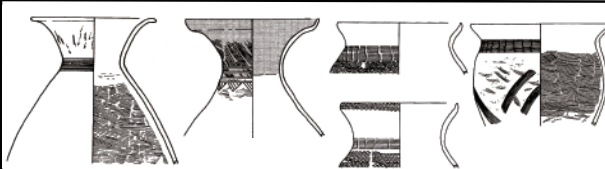
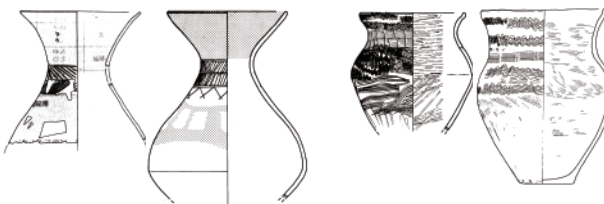
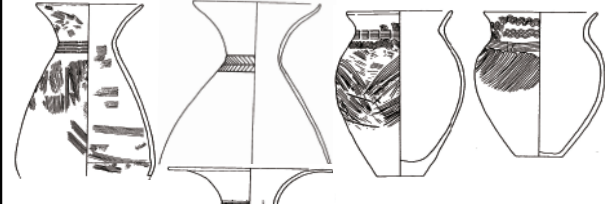
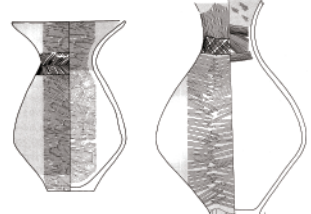
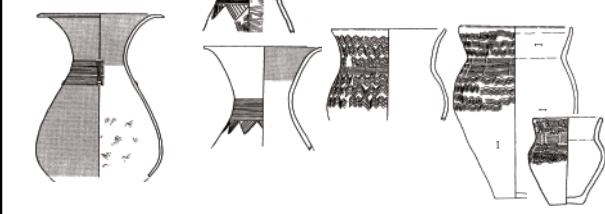

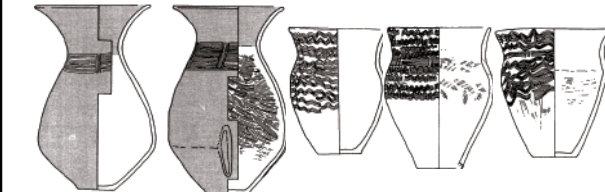
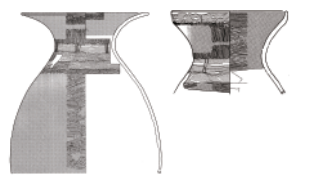
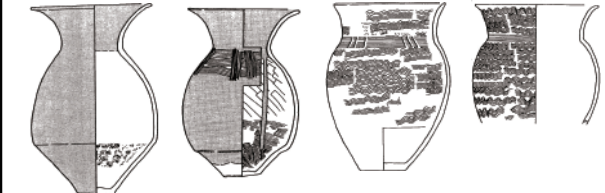

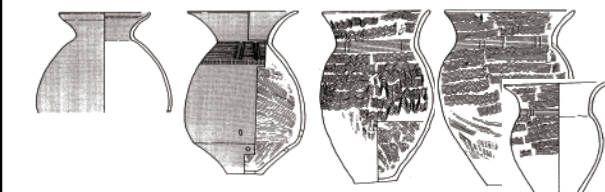
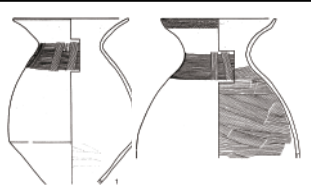
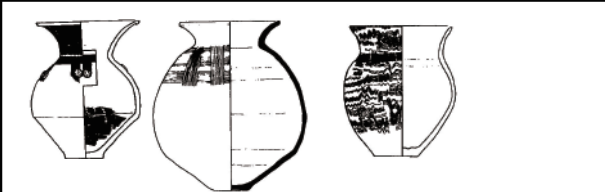

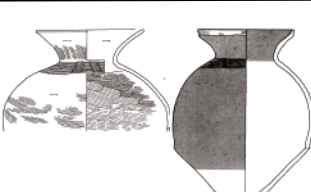
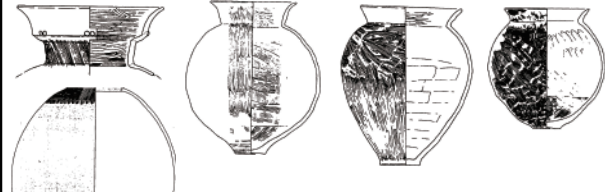
時期			佐久盆地北部		長野盆地
弥生後期前葉	小山Ⅰ期	成立		青木 1 段階	
	小山Ⅱ期			青木 2 段階	
弥生後期中葉	小山Ⅲ期古	へラ描矢羽状文 クシ描横羽状文		青木 3 段階	
	小山Ⅲ期新			青木 4 段階	
	小山Ⅳ期古			青木 5 段階	
弥生後期後葉	小山Ⅳ期新	消滅		青木 6 段階	
	小山古墳Ⅰ期古			青木 4 期	
古墳前期前葉	小山古墳Ⅰ期新				
古墳前期中葉	小山古墳Ⅱ期	消滅		青木 5 期	

図 1 佐久盆地北部と長野盆地の後期弥生土器対比



圀炉が復活する。諏訪盆地では資料が少ないためバイアスが平準化できていないが半数を超える高率で石圀炉が使用されたい。この影響が佐久盆地・松本盆地南部・上伊那盆地にまで及び、それぞれ 13.8%・10.5%・8.3%の割合で採用されている。

### 後期前葉

下伊那・上伊那・松本盆地南部は埋甕炉が突出して多く、下伊那・上伊那で 7 割超、松本盆地南部で 6 割を占める。これらと隣接する茅野市域では 4 分の 1 強の割合で埋甕炉が採用され、山梨県甲府盆地でも 1 割が埋甕炉である。埋甕炉が周辺地域への影響を強める時期である。

土器敷炉は誕生地佐久盆地で 1 割 3 分程度の採用率であるが、この時期佐久盆地北部は石圀炉が急増し、半数弱を占める石圀炉全盛時代である。茅野市域では土器敷炉が 1 割強、折衷系の石圀土器敷炉も 1 割強、甲府盆地では石圀炉 1 割、土器敷炉 2 割強、「折衷系」石圀土器敷炉も少数ながら存在している。筆者はこれら茅野・甲府に見られる佐久系の炉の存在は佐久盆地からの移住によって生じたものとみている。土器敷炉はこのほか、松本盆地南部で 6.7%（石圀土器敷炉は 13.3%）、長野盆地南部で 3.3% 見つか、土器様式に影響を与えない地域にも広がっている。換言すれば土器敷炉が 1 割を超える地域（茅野・甲府）は、佐久系箱清水式土器の影響が濃い地域と言うこともできる。

### 後期中葉

下伊那では、埋甕炉が一時的に激減し 1 割を割り込み地床炉が主体となる。橋原式土器様式圏の上伊那では前代の流れを継承し埋甕炉が 8 割超を占め、諏訪では 9 割 5 分と埋甕炉の全盛期となる。佐久系箱清水式土器様式の分布地域である茅野でもこの影響を被ってか 5 割が埋甕炉となる。この時期に南信系多段帯状文系土器様式から箱清水式土器様式への転換が図られる松本盆地南部は埋甕炉が 8 割超を占め、そのほかは石圀埋甕炉であることから、炉については土器様式の転換に関わらず専ら南信系を採用し続けていることがわかる。松本南部の埋甕炉はさらに北上、箱清水式土器様式色が強い松本北部にも 2 割存在している。

佐久北部では土器敷炉が多用され 6 割 5 分超、前代盛行した石圀炉は激減し 2 % 未満、地床炉は 3 割超の割合となる。佐久北部での土器敷炉の盛行に伴い、千曲川中流域の上田盆地北部でも 3 分の 1 が土器敷炉となる（上田盆地は佐久盆地よりも一歩遅れて石圀炉全盛となり 3 分の 2 を占める）。千曲川をさらに流れ下った長野は地床炉地帯であるが、この時期南部では 1 割弱が土器敷炉、さらに下流の北部飯山市でも 1 例ではあるが土器敷炉が見つかっている。松本南部・諏訪・上伊那などの県中央部では今のところ土器敷炉は未発見で、飛び地的に下伊那で土器敷炉、松本北部で石圀土器敷炉が見つかっている。群馬県では佐久に近接する安中市で 5 例の土器敷炉が確認されている。

茅野市域では全体の 5 割を占める埋甕炉に次いで石圀炉が全体の 4 分の 1、2 割 5 分を占め、土器敷炉・地床炉は 1 割超である。この時期南信系の炉が圧倒的多数を占める長野県中部にあつて、茅野市域では「佐久系」の炉も健在である。土器様相をみると後期前葉で佐久からの移住は完了しているが、佐久系箱清水式の影響が色濃く残っている状況である。山梨県は後期前葉と中葉の分別ができていないため、詳細不明であるが佐久系の炉が健在であることは間違いない。

後期中葉は「佐久系」土器敷炉が最も広域展開した時期ということもできる。

### 後期後葉

下伊那では埋甕炉が 6 割超と復活、上伊那では 1 0 割、諏訪では 9 割超と埋甕炉全盛が続く。ところが前代で 8 割強を誇った松本南部は 5 割弱に後退、後期ではそれまで少数派であった地床炉が 2 割 5 分弱、土器敷炉と石圀埋甕炉がそれぞれ 1 割強、石圀炉 1 割弱という構成になる。土器様相から見ると南信系土器様式から北信の箱清水式土器様式への転換と連動した「南信系」炉の後退現象と見られる。

佐久北部では土器敷炉が 7 割 5 分弱で前代に続き全盛時代であるが、周辺地域への影響は弱まり、広域展開もしなくなる。上田では土器敷炉が 1 割強、石圀炉は 1 割弱と後退、長野盆地では土器敷炉・石圀炉ともに消滅する。



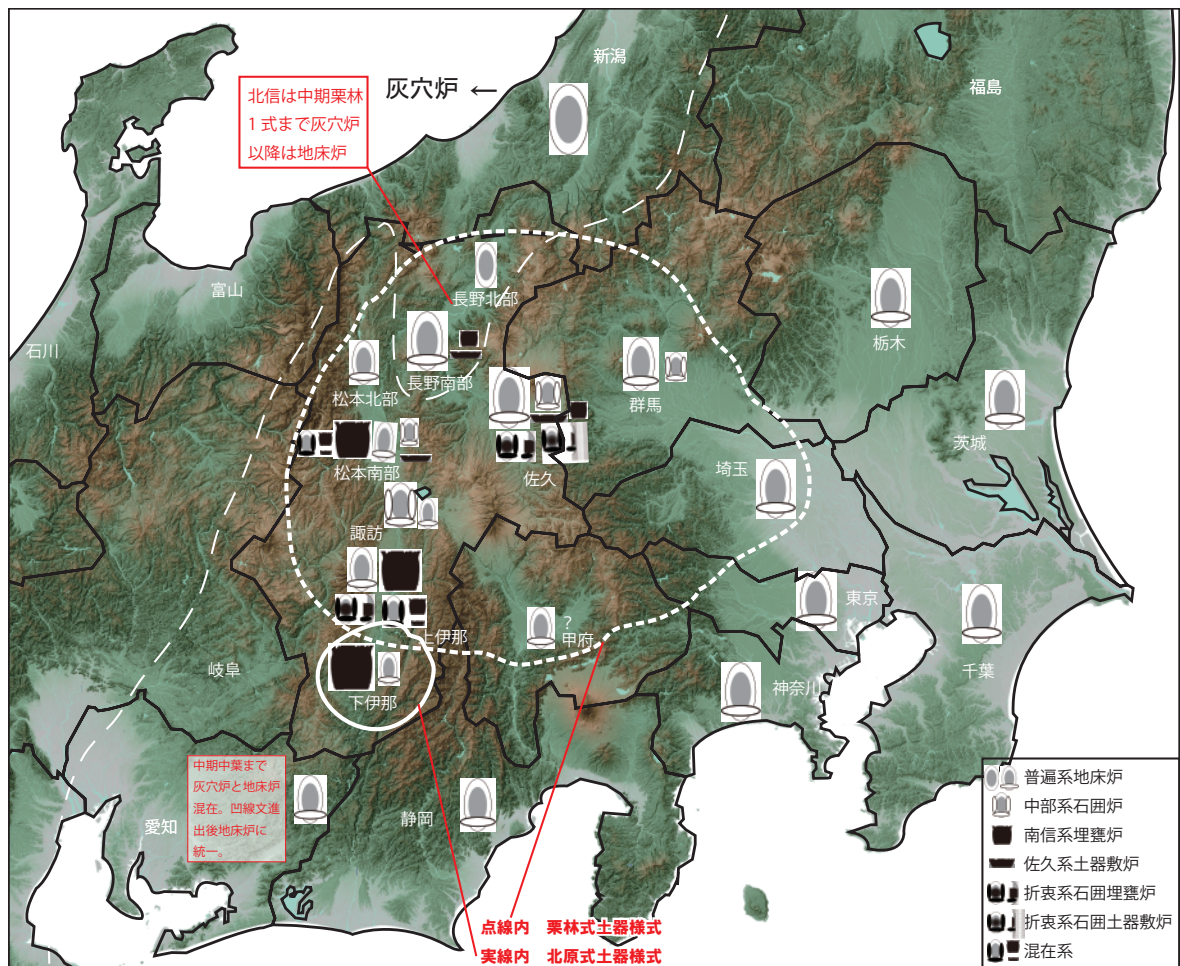


図2 信州を中心とした弥生時代中期後葉の炉と土器様式の分布状況

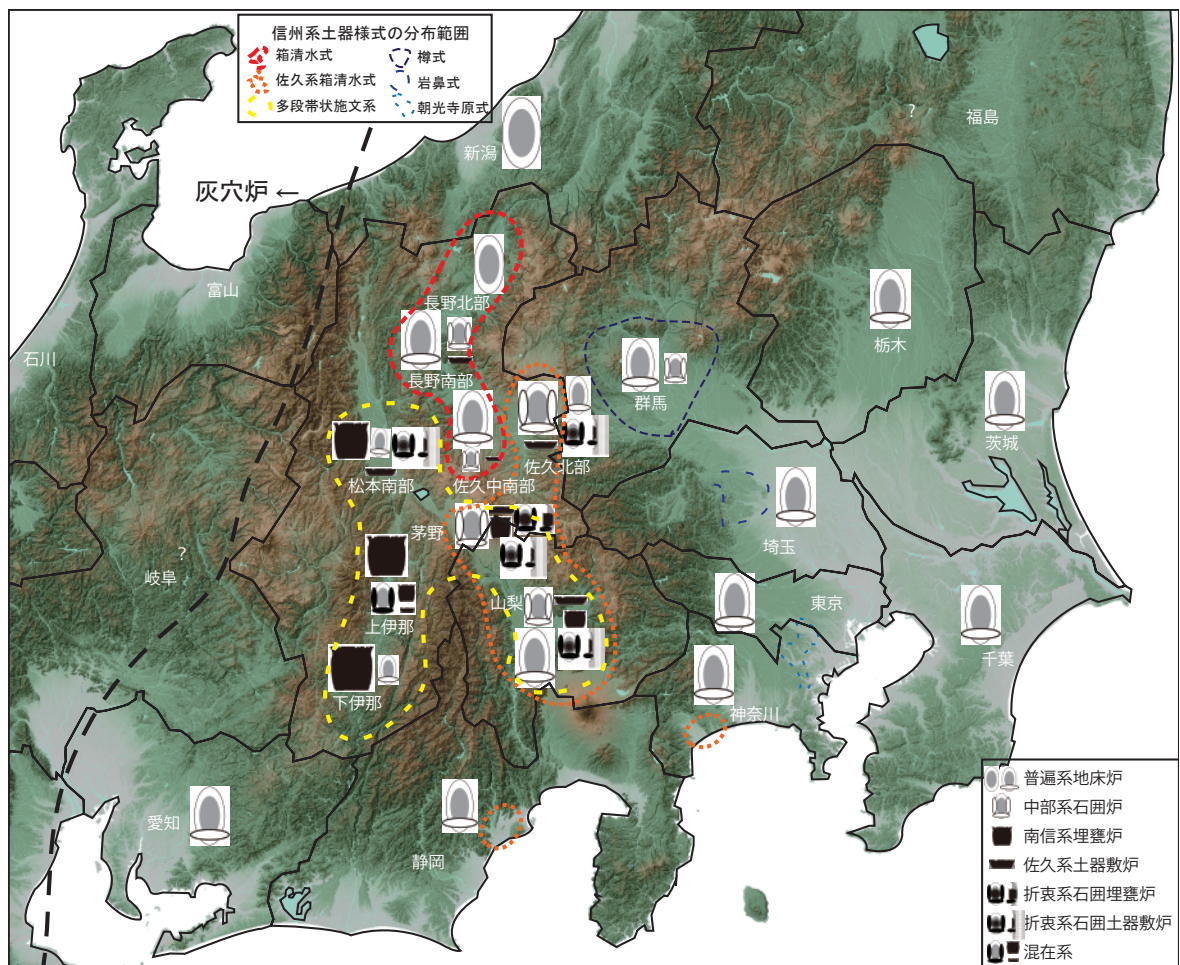


図3 信州を中心とした弥生時代後期前葉の炉と土器様式の分布状況



前代まで土器様式・炉ともに佐久北部との関係性の強さが看取された茅野はこの時期の状況が不明、山梨県では地床炉全盛となり9割5部超、土器敷炉は消滅したようで、石囲炉が1例のみ確認できたのみである。土器様式も佐久系箱清水式の色彩はほとんど見られなくなる。

#### 古墳時代前期前葉

詳細不明な地域もあるが、信州独自の埋甕炉、石囲炉、土器敷炉はいずれも古墳時代になっても命脈を保っていた。特に埋甕炉は息が長く、下伊那で7割超、上伊那・諏訪では10割という圧倒的な採用率である。周辺地域では山梨県で1割弱、佐久盆地で1.8%が確認できる。

土器敷炉は佐久で3割弱残存しているほかは、上田盆地で4.5%見られる程度である。

#### 古墳時代前期中葉

全県的に地床炉への傾斜を強める時期である。下伊那はすべて地床炉、上伊那は地床炉・埋甕炉が5分5分である。松本南部では2割強、松本北部では2割弱の埋甕炉が存在する。

佐久では土器敷炉が5.3%わずかに残存する。特異な存在は松本北部で地床炉が5割を占める中で、石囲炉・土器敷炉・石囲埋甕炉・埋甕炉がそれぞれ12.5%ずつ存在する。

### 4 「佐久系」土器敷炉と土器からみた集団移住の可能性

「佐久系」土器敷炉を軸に追跡すると弥生中期後葉に佐久で成立、栗林式土器と磨製石斧流通などの文物往来に伴って長野・松本にも拡散する。

後期前葉になると12.9%であるが佐久北部での占有率が県内では最も高く、佐久系箱清水式土器様式が到達する茅野市域で10.5%、山梨県で22.5%と高い比率を示す。松本南部の土器敷炉の比率は低く6.7%、長野南部はさらに低く3.3%で両地域とも佐久系箱清水式は見られない。

山梨・茅野・松本南部は佐久にない「折衷系」石囲土器敷炉が一定の割合を占めるのも特徴である。

以上見てきた中で土器様式と炉がセットで佐久系が存在する地域は茅野地域と山梨県で、私はこの現象を佐久集団の移住の結果と見る。

後期中葉に佐久北部は占有率65.6%と土器敷炉盛行期を迎える。佐久集団が移住したと目される茅野市域の土器敷炉は12.5%と伸び悩む。中葉まで佐久集団の移住が続いていたのであれば土器敷炉の比率も高まるはずであるが、低率にとどまった要因は移住が完了していたことを示していると私は考える。

なお、この時期佐久系箱清水式土器の影響は見られないが、土器敷炉は諏訪・上伊那・松本南部を除く長野県の広い地域とさらには群馬県安中市にまで少数派ながら存在する。土器敷炉が最も拡散した時期である。

後期後葉になると佐久北部での土器敷炉の比率はさらに高まり74.5%となる。他地域の存在は近隣の上田で13.2%、峠を隔てた松本南部で11.9%見られる程度で、前代のような広域拡散はなく分布範囲の狭隘化が顕著である。山梨・茅野では土器敷炉が消滅し、特に山梨では東遠江の菊川式土器の色合いが濃くなり、佐久系箱清水色の退潮が著しい。

続く古墳時代前期は松本盆地でも土器敷炉が消滅、その分布は佐久・上田の東信一帯に限られるようになる。

#### 金の尾遺跡全体図の分析から

図8には山梨県甲斐市金の尾遺跡の弥生後期住居の炉の分布状況と出土土器を重ねあわせた。図中の波線を境にして南側は土器敷炉8例、石囲炉4例、埋甕炉4例とすべてが信州系の炉である。一方、北側はすべてが地床炉で、山梨県という地理的位置から見て東海系の炉と判断できる。

稲垣自由は波線から南側の住居址には後期前葉～中葉佐久盆地Ⅱ期～Ⅲ期古に併行する金の尾Ⅰ式2～3段階の土器が多く、北側には後期中葉佐久盆地Ⅲ期新に併行する金の尾Ⅱ式1段階の土器が多いことが確認できる<sup>(4)</sup>という。すなわち、金の尾遺跡における弥生後期住居の炉の分布状況の変移は、時期によって採用された炉が異なっていることを表している可能性が高いのである。

甲府盆地の弥生後期の土器様相は、後期後葉（金の尾Ⅱ式2段階）を境に佐久系箱清水式の影響が極端に薄



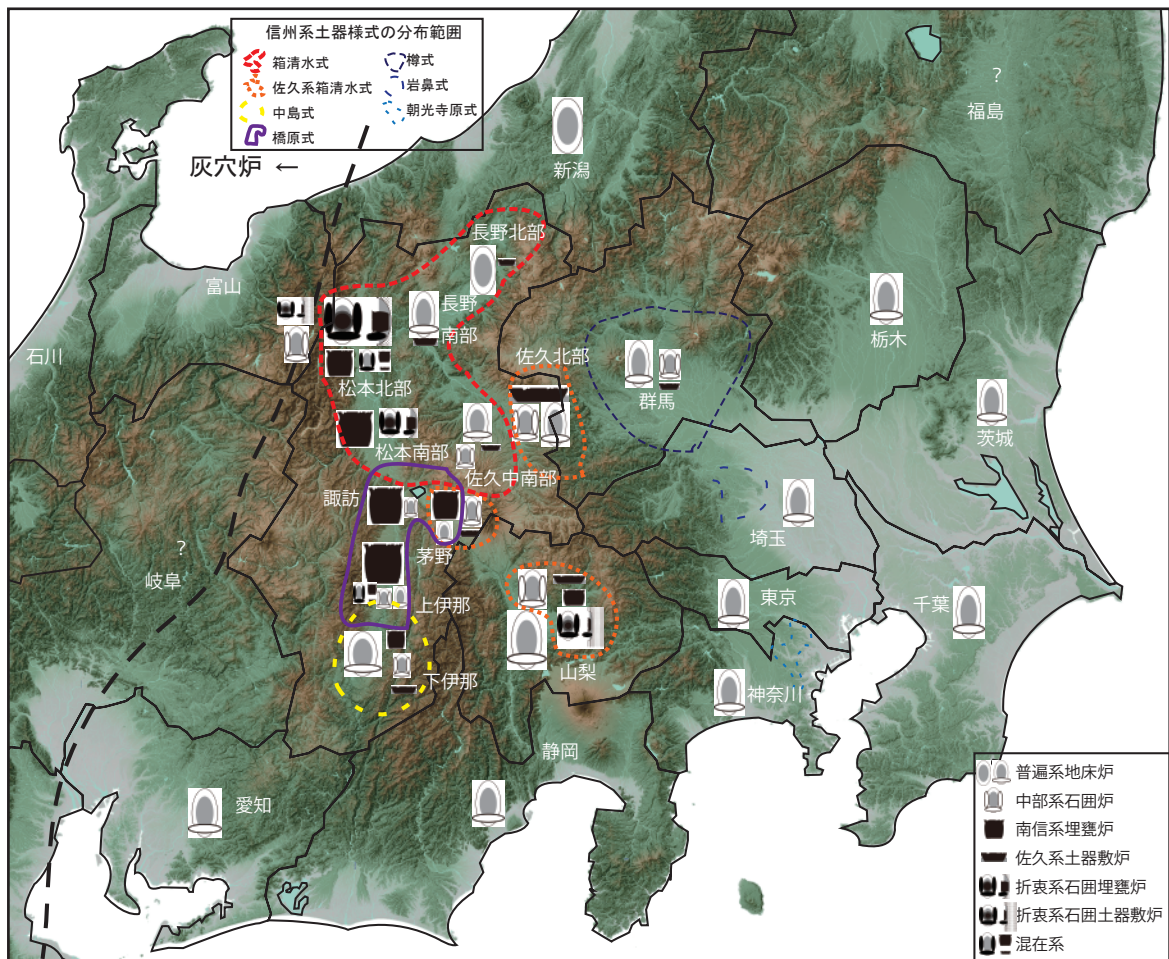


図4 信州を中心とした弥生時代後期中葉の炉と土器様式の分布状況

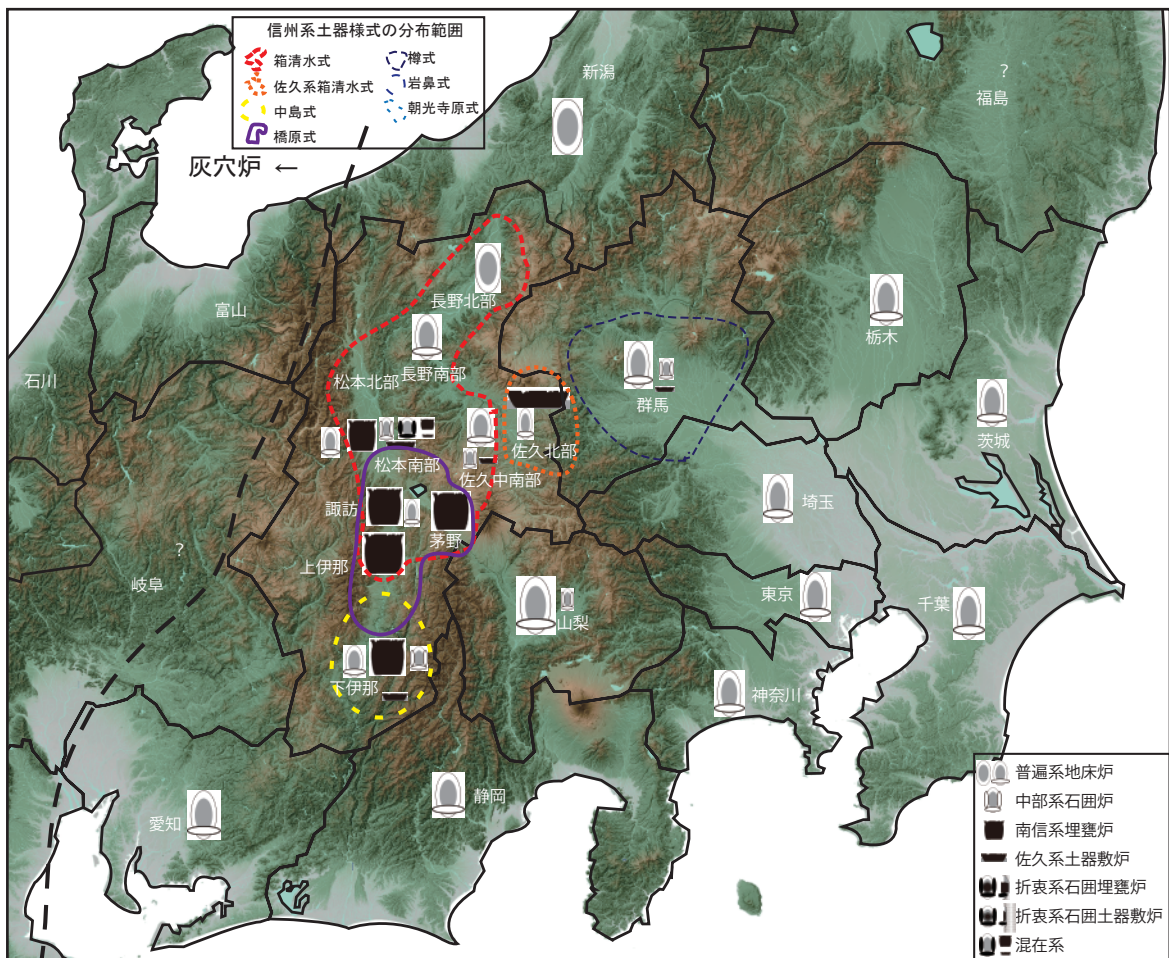


図5 信州を中心とした弥生時代後期後葉の炉と土器様式の分布状況



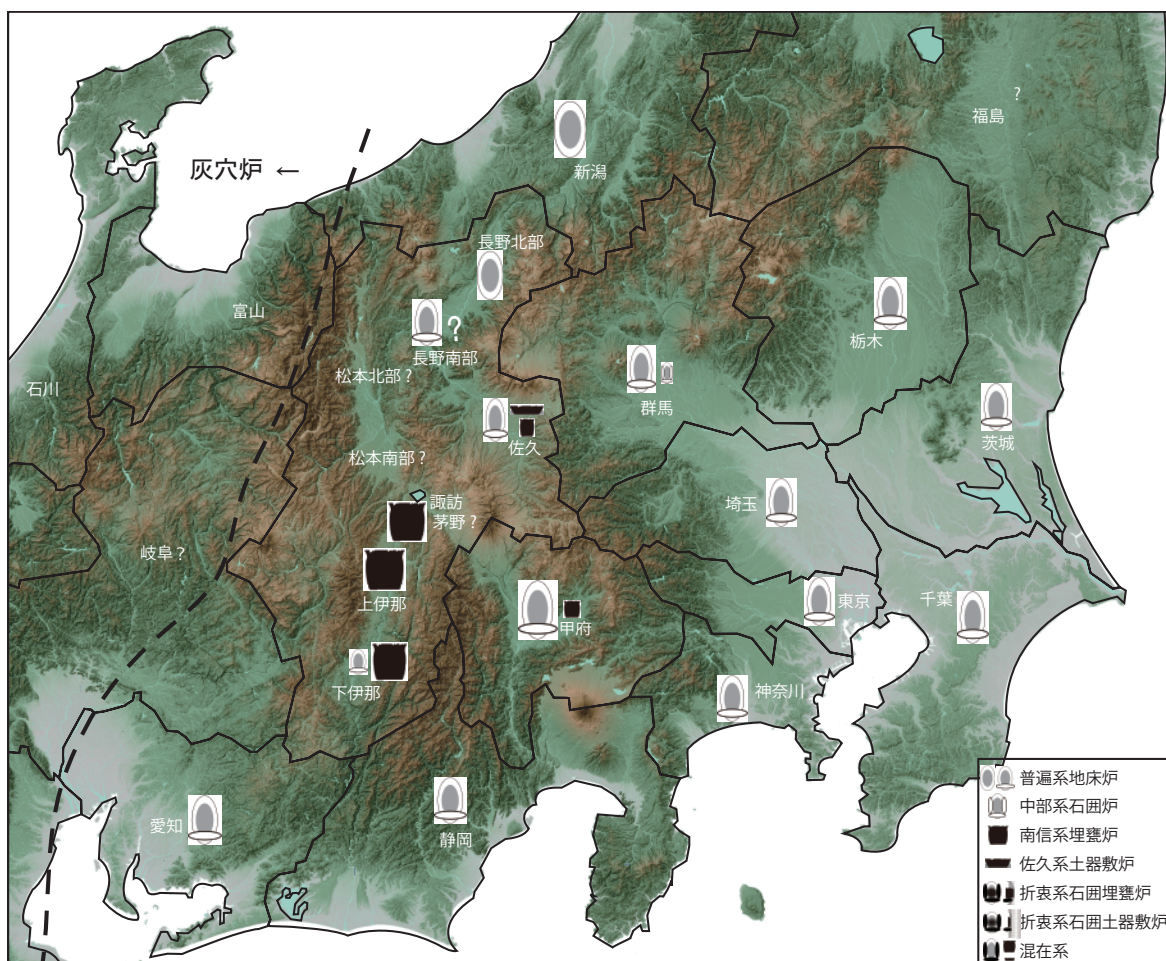


図6 信州を中心とした古墳時代前期前葉の炉の分布状況

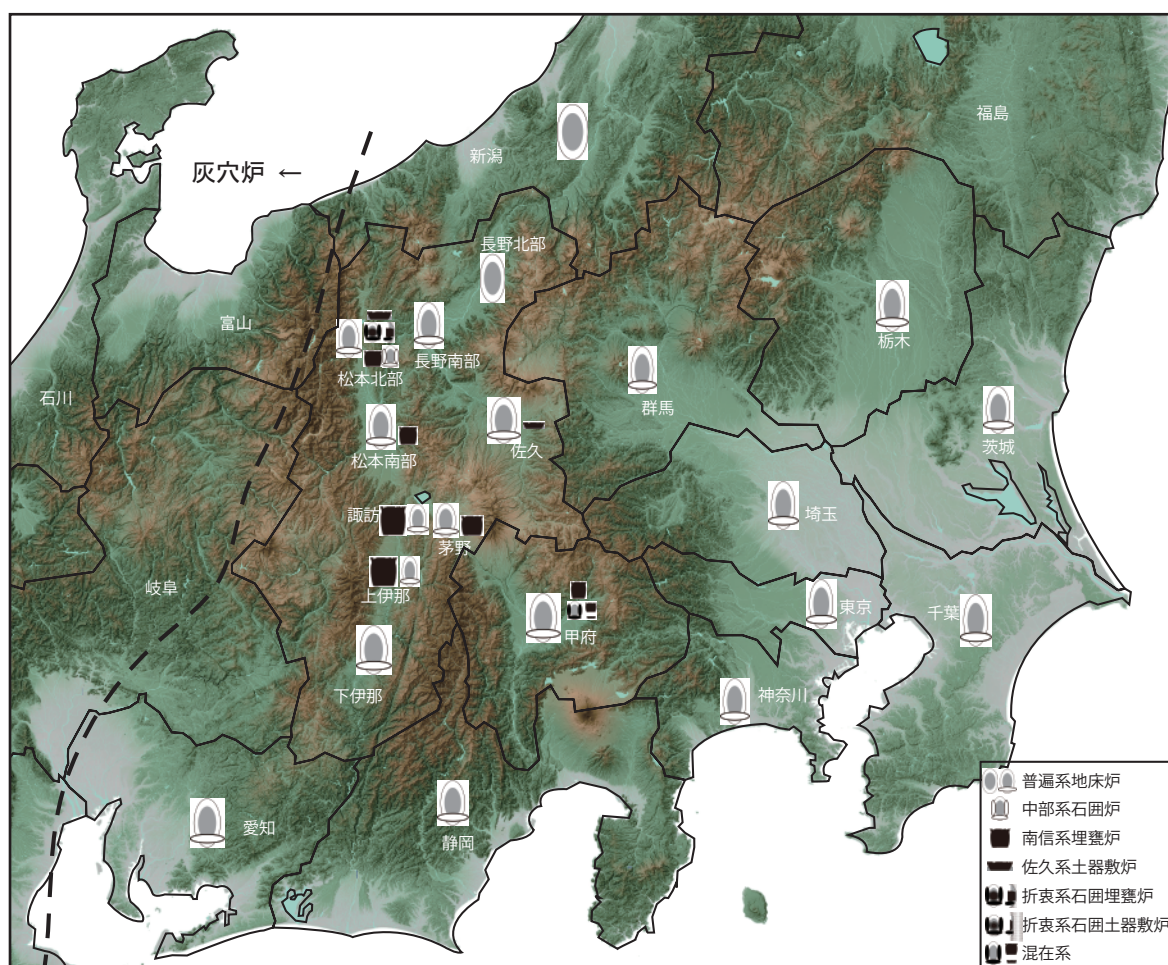


図7 信州を中心とした古墳時代前期中葉の炉の分布状況



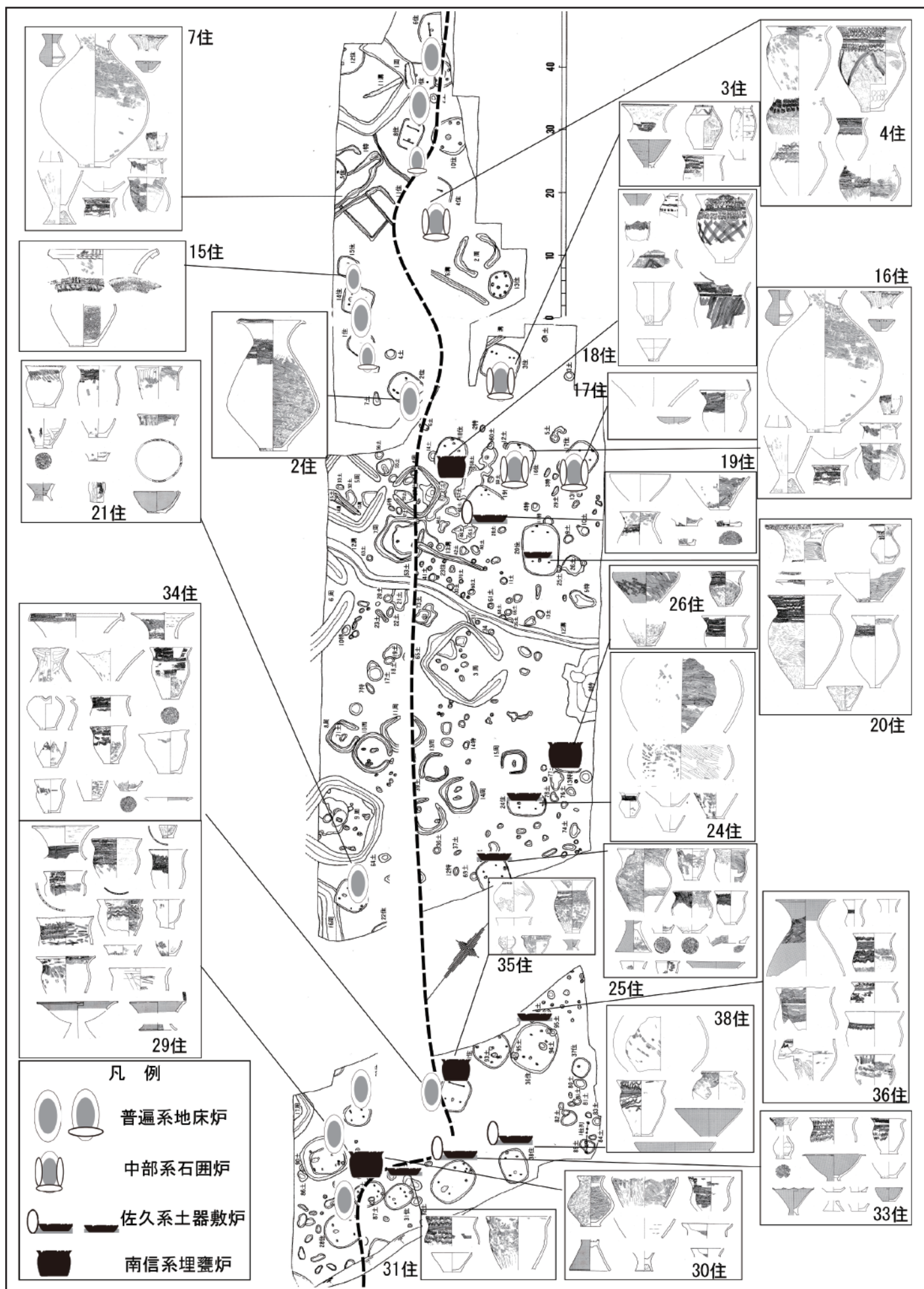


図8 甲斐市金の尾遺跡弥生時代後期住居の炉の分布状況と出土土器

まり、東遠江の菊川式の進出が顕著になる。炉の変移は後期中葉（金の尾Ⅱ式Ⅰ段階）から始まっており、土器様式の転換よりも一歩先んじていることになるが、図8はそういった甲府盆地の弥生社会の変容過程の一端を表しているものと考えられる。

移住と仮定して推考すれば、佐久からの山梨への移住時点及びその後の1世代後裔の後期前葉から中葉金の尾Ⅰ式2～3段階までは、土器様相・炉ともに佐久系を中心に信州色を墨守、2世代以降と目される後期中葉金の尾Ⅱ式Ⅰ段階からは、菊川式東遠江集団の影響の漸増も相俟って伝統的な信州系の生活様式が弛緩した結果、信州系の土器敷炉・石囲炉・埋甕炉などから東海系地床炉の転換に至ったものと考えられる。

ここまでは、土器様相と炉の類似性から弥生時代後期前葉に佐久盆地から山梨県甲府盆地・茅野市域に集団移住があったことを想定した。次に山梨県甲府盆地で佐久系箱清水式土器から昇華した金の尾式土器の太平洋沿岸地域への搬入の可能性について考察する。

## 5 「金の尾式」土器太平洋沿岸へ

### （1）駿河の状況

駿河静岡県静岡平野の川合・瀬名・有東遺跡では弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて信州系と目される櫛描文を施す甕が出土している<sup>(5)</sup>。7月2日から4日にかけて静岡県登呂博物館、県立埋蔵文化財センター、沼津市埋蔵文化財センターへ資料調査に出向き、これらの甕を実見したところ、静岡平野の在地の有東式土器～登呂式土器とは胎土が全く違い一瞥で峻別できた。一方、沼津市浮島沼周辺の櫛描文土器は在地と考えられる雲母を含まない胎土であった。

静岡平野の在地の胎土は概ね白色系から黄褐色あるいは橙色の胎土で主に砂粒を含むのに対し、信州系の甕は弥生中期後葉から後期前葉までほぼ一様に灰褐色を呈し、緻密で雲母片を多く含有するためキラキラと光彩を放つなど静岡平野の在地土器との識別が可能で、搬入品と見分けることができる<sup>(6)</sup>。雲母を多く含む灰褐色の胎土は、あくまで肉眼視で判断している段階で今後科学的な分析が必要であるが、甲斐山梨県甲府盆地の金の尾式の胎土と類似することから私はこれらの甕は甲府盆地から搬入された可能性が高いと考えている。

では胎土以外の要素で甲府盆地—静岡平野間の類似性はあるか？土器文様については中期後葉では川合遺跡の中部高地系土器とまとめられた土器群中の甕、このうち、図9—1の器面全体を充填しない簡略な櫛描縦羽状文については、本場の千曲川流域の栗林式土器にはなく甲府盆地でも資料が少ないことも相俟って類例がない状況であるが、後の後期前葉に甲府盆地・茅野市域・神奈川県西部で発達する図9—7・11・16の大振りな櫛描山形文の先駆を成す文様と考えることができる。

後期前葉（篠原和夫が示す変遷図<sup>(7)</sup>の2番目の時期）では瀬名遺跡5区SR51301の甕図9—18は頸部櫛描直線文の有無の違いはあるが、甲斐市金の尾遺跡38号住居址出土の甕図9—8、茅野市家下遺跡54号住居址出土の甕図9—5と形態が近似する。38号住居址からは菊川式の組成に見られる鉢図9—13も出土している。

駿河静岡平野では、時代を通じて甕以外の器種に搬入品と考えられる胎土は観察できなかった。

壺については川合遺跡SX11607図9—4や2号方形周溝墓図9—3で中期後葉の有東式土器に混じって栗林式類似の壺が出土している。しかし、胎土は在地の胎土とは峻別できなかった。また、文様についても本場の栗林式土器よりも施文箇所が上方にずれていたり、栗林式土器には通常見られない複合鋸歯文が施されているなど、文様あるいはその構成に微妙なズレが看取された。私はこれらを搬入品というよりも、静岡平野制作の栗林式類似土器と判断した。赤色塗彩される高坏や鉢などの胎土については、雲母を含む甕の胎土とは異なっており、今のところ搬入品と確定できる材料がない。

後期の登呂式土器は、壺に櫛描文波状文と赤彩を多用する駿河静岡平野という狭い分布圏に発達する土器様式である。刷毛工具による突刺羽状文の東遠江の菊川式土器、南関東系の流れを汲む羽状縄文装飾に象徴される東駿河の雌鹿塚式土器との狭間にあって小地域ながら櫛描文・赤彩を多用する異質な特徴をもつ<sup>(8)</sup>。篠原和夫は櫛描文と赤彩を多用する背景を信州の後期弥生土器箱清水式の影響と考えた<sup>(9)</sup>。私も以下に記す資料調査







の搬入品があったことから明白であり、信州・甲斐では甕に施された中部高地型の櫛描波状文が登呂式においては壺の主文様として置き換えて採用されたと考える<sup>(12)</sup>。

赤塗については、信州の後期弥生土器が押しなべて土器焼成前、施文後にスリップ（ベンガラを混ぜた液状の化粧土）を器面に塗り、乾燥を待ってスベスベの小石などで磨きあげて光彩を放っている<sup>(13)</sup>のに対し、登呂式の場合は信州と同様の手法をとるもの、施文前に赤彩するもの、ひと塗りしただけで磨きが甘いものなど手法に統一性が見られず、鮮やかさに欠ける仕上がりが多い。また、赤色の発色も信州では一様に鮮やかな赤色で良質なベンガラを統一的に用いているのに対し、登呂式では赤系、オレンジ系、黒ずんだ赤、茶褐色に変色したもの<sup>(14)</sup>など良質なベンガラを調達することができず、とりあえず赤く塗ることを優先したかのような壺が多い。以上のように登呂式の赤彩は箱清水式などの赤彩とは似て異なる要素が多いが、金の尾式に接したことがきっかけで生じたものであった可能性が高いと考える。

## （２）相模の状況

相模神奈川県金目川流域や酒匂川流域（足柄平野・大磯丘陵・相模平野）で後期の信州系弥生土器が散見される。立花実は大磯町馬場台遺跡、小田原市千代南原遺跡、平塚市真田・北金目遺跡などから出土した中部高地型櫛描文が施文された甕を集成、金の尾遺跡出土土器との形態及び文様の類似からその出自を甲斐山梨県に求めた<sup>(15)</sup>。また、これらの土器の時間的位置づけは、共伴する菊川式土器の特徴から後期初頭とした。

馬場台遺跡 17 住出土土器は、縦羽状に近い櫛描斜状文を有する甕図 9-15 が甲斐山梨県にも存在（図 9-15）するほか、山形文の頂部に円形浮文を貼り付ける甕図 9-16・11、刷毛調整甕図 9-9・14 などの信州系土器のほか、菊川式の壺図 9-12・17 の存在など、甲斐山梨県との共通性が強い。

私が形態・文様のほかに注目するのは、立花が信州系の甕は緻密な胎土で金雲母が多く含まれると報告している点である。現地にて 17 住出土の信州系甕図 9-15・16 や刷毛調整甕図 9-14 を観察したところ、灰褐色を呈し、緻密で雲母を多く含んでおり、駿河静清平野や甲斐甲府盆地出土の信州系甕の胎土とよく似るものであった。いっぽう、同じ 17 住出土の菊川式土器図 9-17 や久ヶ原式土器の胎土は、淡い燈褐色～白色系できめ粗く、雲母を少量含む胎土であった。肉眼視のレベルであるが甲斐の甲府盆地、駿河の静清平野、相模の大磯丘陵の信州系弥生甕の胎土は極めて共通性が高いことが実証できた。

## （３）小結

以上の観察から私は、駿河と相模における信州系土器は、いずれも甲斐の金の尾式土器が搬入品されたものと推定する。駿河のうち西側の静清平野という限られた地域では、信州系弥生土器の櫛描文や赤彩積極的に受容して登呂式が成立した。

いっぽう、相模西部の足柄～相模平野の金目川・酒匂川流域は後期前葉に東遠江の菊川式や東駿河の雌鹿塚式など東海東部系土器の直接的な影響が及んでいる地域であることが判明しているが、形態・文様ともに在地の土器に信州系金の尾式土器の要素を取り込むことはなかった。両地域の差異は信州系金の尾式土器要素の在地土器への取り込みの有無にある。

駿河・相模出土の金の尾式土器はほとんどが甕である。甲斐から駿河・相模の海岸部に至った人々は、おそらく持参したコメ・アワ・キビを調理する煮炊き用の器も携えてきたのである。食糧を現地調達せず、携行した理由は何であったのか考察してみる価値がある。

相模神奈川県中央部の相模川流域は綾瀬市神崎遺跡や海老名市本郷遺跡などの山中式の環濠集落に象徴されるように、後期中葉において西遠江や東三河など東海西部からの集団移住が想定されている。この地域では、今のところ信州系弥生土器の出土は聞かない。

炉については弥生中期～後期を通じて駿河・相模ともに「佐久系」土器敷炉、「南信系」埋甕炉、「中部系」石囲炉など信州系の炉の発見例はなく、地床炉地帯である。

## 6 まとめ

### (1) 信州系土器南下の意味

#### ① 中期 栗林式土器の南下

先述したように中期後葉には駿河・静岡・静清平野に甲斐・甲府盆地産と見られる搬入品の栗林式の甕の存在していた。また、静清平野在地の有東式土器は栗林式土器の文様や文様構成を少なからず受容しており、栗林集団の影響力の大きさを感ぜさせた。栗林集団が静清平野に至った経緯は、静岡市川合遺跡で長野盆地の妙徳山産出の緑色岩類で制作された榎田産磨製石斧が出土していることから、栗林2式新段階における磨製石斧の流通と交易が、甲府盆地経由で静清平野にも及んだためと考えるのが妥当であろう。ちなみに長野市を生産拠点とする榎田産磨製石斧は日本海側では西は福井県、東は新潟県柏崎市、太平洋側では西は静岡県、東は千葉県まで東日本南部に広域流通しており、南下するだけでなく北上もしている。周辺各地から交易を求められた弥生時代屈指の優秀な伐採工具だったのである。

栗林集団が静清平野に至った主要道は、甲府盆地から静岡県静岡市（清水区）に向かって真っすぐに南下する河内路であった可能性が高い。身延山・久遠寺の参詣道として知られる古道である。そのルート上にある南アルプス市・油田遺跡では栗林式土器が確認されており信州から駿河の中継地点の一つであったと見られる。

駿河で栗林集団の進出が確認されるのに対し、相模では栗林集団の痕跡が確認されていない。しかし、富士吉田市上暮地・新屋敷遺跡や富士河口湖町・滝沢遺跡（第5次）では栗林式土器が出土しており、ここから南東方向の御殿場へ下り足柄峠を越えて足柄街道を進めば小田原市が所在する足柄平野に至る。全行程約70kmと至近である。今後、相模西部で栗林式土器が発見される可能性は残っている。

栗林集団がもたらした榎田産磨製石斧の交換品は何であったか。静清平野の弥生時代の生産品の代表格は鍬・鋤などの木製農耕具で、中期後葉段階でも有東遺跡や川合遺跡などで活発に制作されている。長野県千曲川流域の弥生中期後葉から後期の遺跡では東海系と考えられる曲柄鍬が点々と発見されている<sup>(16)</sup>ことから、交換品の一つは木製品であった可能性が高い。

#### ② 後期 金の尾式土器の南下

先述のように後期になると駿河・相模出土の信州系の甕は雲母を多量に含む共通の胎土で搬入品の可能性が高く、その出自は山梨県の金の尾式であることが想定された。その大元になるのは後期前葉に山梨県へ南下した佐久系箱清水式である。

金の尾式が進出した太平洋沿岸地域のうち、駿河・静岡県・静清平野は金の尾式の櫛描波状文や赤彩を積極的に取り込んで登呂式土器を成立させるといった融合的な様相を呈していた。いっぽう、相模・神奈川県・足柄平野から相模平野は東遠江の菊川式・東駿河の雌鹿塚式の主体的分布が認められ、これに南関東の久ヶ原式、甲斐の金の尾式が共存していた。金の尾式は他の様式と混在するが融合することではなく、静清平野に比べると存在感が薄い。金の尾式の受容の度合いには、地域ごとの濃淡が認められた。

弥生中期栗林期における長野盆地・榎田産磨製石斧流通停止後、後期になってからも甲斐の金の尾式の集団が駿河・相模の太平洋沿岸に進出していた。その背景には何があったのであろうか。

金の尾式の搬入ルートは栗林期の道筋が記憶されていたと考えられ、静清平野へは河内路、足柄平野へは御殿場経由の足柄街道であった可能性が高い。磨製石斧に代わる交換品として明らかに信州あるいは甲斐産と断定できる物は相模・駿河ともに出土していない。後期は鉄器化の時代であるので金属製品と考えることもできるが、信州・甲斐ともに後期前葉の鉄製品が確認されていない状況<sup>(17)</sup>では、交換品を金属製品に絞り込むことは難しい。駿河で後期前葉に位置づけられる静岡市駿河区・鷹ノ巣遺跡の鉄釧<sup>(18)</sup>は、帯金の幅が広く平林大樹が分類するB類<sup>(19)</sup>に該当する。B類は東京湾沿岸地域に主な分布を示すことから鷹ノ巣遺跡の鉄釧は南関東からもたらされた可能性が高く、甲斐からもたらされた物は今のところ不明と言わざるを得ない。

駿河・相模から甲斐そして信州へもたらされた交換品の一つは、中期以来の木製品であった可能性が高い。その根拠は後期に至っても、千曲川流域では点々と東海系の曲柄鍬が出土しているからである。

### ③ 岩鼻式土器の南下と朝光寺原式土器

以上考察してきた後期前葉における信州系土器集団の南下は、信州佐久盆地から甲斐甲府盆地の東側の地域でも確認されている。北武蔵の埼玉県比企丘陵を中心とする地域に分布する中部高地型櫛描文をもつ岩鼻式土器分布圏から南武蔵の東京都・神奈川県にまたがる多摩丘陵に分布する朝光寺原式土器分布圏への南下である。柿沼幹夫は朝光寺原式と岩鼻式は同一型式と考えてもよいとし、部族集団の半族のような関係にあった可能性も考えている<sup>(20)</sup>。

### ④ 寒冷地適合農業集団の南下

以上本稿では、弥生後期前葉において信州佐久盆地から甲斐甲府盆地や信州茅野市域への集団移住を土器や炉の共通性から推定した。北から南への同様な移住は、北武蔵比企丘陵から南武蔵多摩丘陵の岩鼻式と朝光寺原式の土器の共通性からも想定された。列島中央部の東西2つの地域で内陸から海岸部への信州系土器集団の移住の痕跡が認められたのである<sup>(21)</sup>。

両地域はかつて信州一円の栗林式、南関東の宮の台式という弥生中期後葉に広範な分布を誇った集団の居住地であった。この集団の居住地が中期末に急激にしばむことが判明しており、佐久系箱清水式、金の尾式、岩鼻式、朝光寺原式はいずれも中期の大集団撤退後の空白地に進出して居を構えた点で共通する。

先行論文でも触れたが、移動元である信州佐久盆地と北武蔵は弥生中後期においてコメとともにアワ・キビの雑穀も合わせて栽培する混栽地域であったことが種実痕分析によって判明している<sup>(22)</sup>。コメと雑穀の混栽は、中期末から後期の気候寒冷化に対抗し得る栽培技術である。この寒冷地適合農業を習得した集団が甲斐甲府盆地や南武蔵多摩丘陵の空白地に入植して新たな開拓を始めた可能性が高いことをここで改めて強調しておきたい。

## (2) 課題

### 金の尾式集団太平洋沿岸地域進出の目的

本稿では甲斐金の尾式の集団は、後期前葉のうちにさらに南下し駿河静清平野や相模足柄～相模平野への進出を果たしたことも想定した。進出の目的は、木製農耕具を得るためとの仮説を立てたが実証には至らなかった。今後は交易とともに、開拓という新たな視点で金の尾式の駿河・相模への進出を考える必要がある。

弥生後期前葉の相模足柄～相模平野・駿河静清平野はすでに甲斐甲府盆地のような空白地でなく、菊川式や雌鹿塚式などの東海系集団が耕地開拓をはじめていた地域であり、金の尾式集団が進出した際には独壇場で開拓する余地が残されていない状況であったと考えられる。このため、金の尾式集団はやむなく東海系集団との共生の道を選択したのかもしれない。

本稿では金の尾式集団の海岸部進出の目的について十分な検討ができなかったが、今後さらに追及していきたいと考えている。

### 駿河・相模出土の信州系土器と朝光寺原式土器との関係

中部高地型櫛描文を持つことで共通する朝光寺原式土器の分布範囲である多摩丘陵と相模平野は約40kmを隔てるが至近である。相模平野から足柄平野の搬入品の信州系土器の出自について私は金の尾式と見たが、多摩丘陵の朝光寺原式にあったのではないかという意見もあるので、現段階の見解を加えておきたい。

相模出土の信州系の甕に併行すると考えられる朝光寺原1式<sup>(23)</sup>を比較すると、両者に刷毛調整の甕があるという共通点がある反面、相模の甕は胴部に金の尾式と同様に櫛描斜状文が密に施文されるのに対し、朝光寺原式は斜状文間の間隙が広くまばらな施文である。金の尾式に特徴的な頂部に円形浮文を貼り付ける山形文は相模にはあり、朝光寺原式には見られないなどの相違点がある。朝光寺原式の胎土を観察していないのでここでは判断し切れないが、甕の文様において相模の信州系土器は金の尾式との関係が濃く、朝光寺原式との関係は薄いように感じられる。今後、朝光寺式を実見して相模出土の信州系土器や金の尾式との関係を見極めたい。

本稿掲載の図版については、中尾弘喜、森泉智也、井上文代各氏の指導の賜物である。以下の各氏から教示を得た。磯崎 一、伊藤敏行、稲垣自由、及川良彦、柿沼幹夫、國見徹、桐原健、鈴木素行、篠原和大、立花実、堤 隆、羽毛田伸博、水沢教子、村田健二



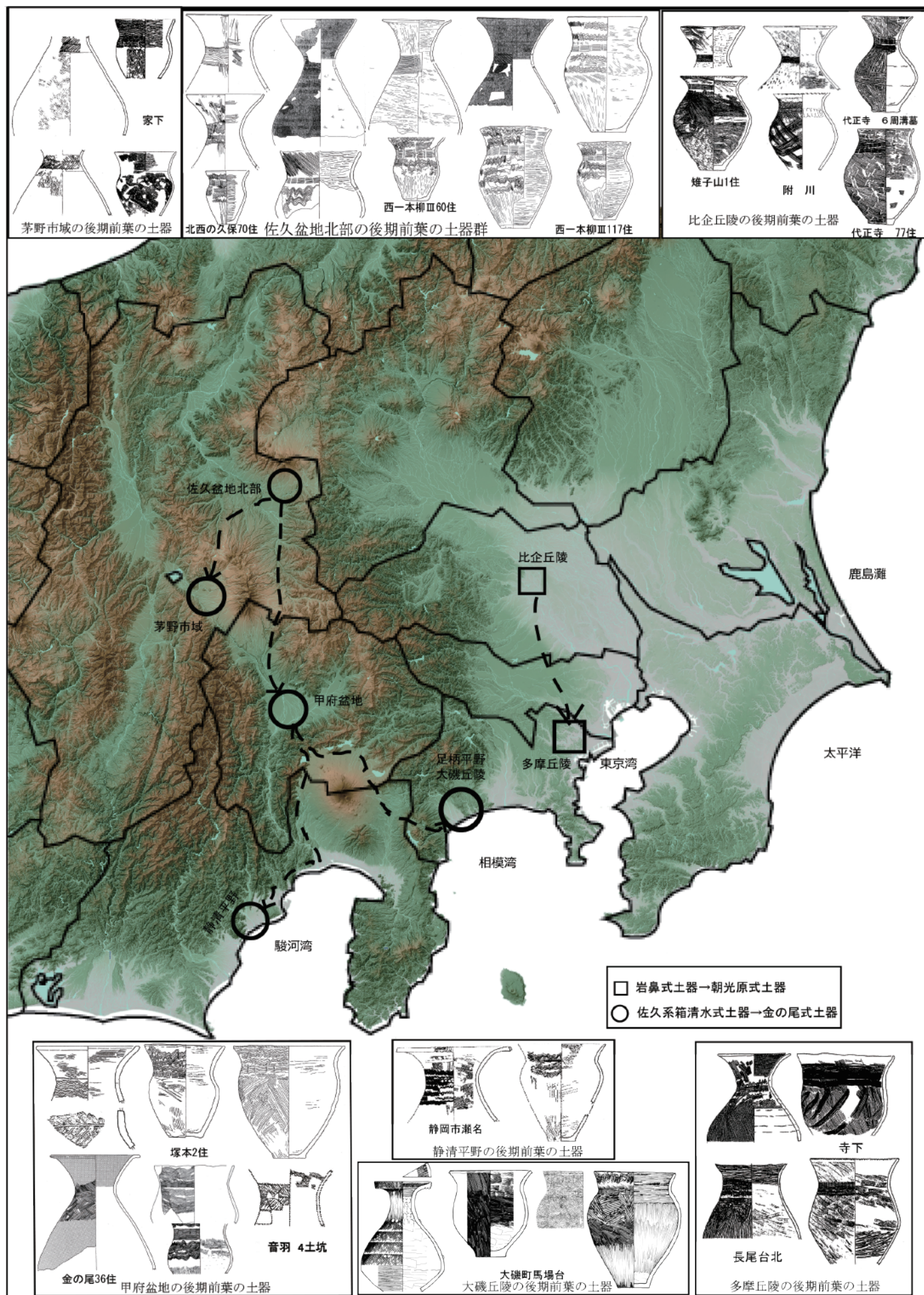


図9 佐久系箱清水式と岩鼻式の南下



## 註

- 1 拙稿 2017.5 「甲府盆地一円と長野県佐久盆地・茅野地域の弥生時代後期の繋がり」『山梨県考古学協会誌』第 25 号
- 2 拙稿 2017.11 「弥生時代の炉 再々考」『長野県考古学会誌』第 155 号
- 3 前掲註 2
- 4 稲垣自由の教示。稲垣自由 2015 「甲府盆地における土器の地域性」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学研究会
- 5 篠原和大 2010 「駿河地域の中部高地系土器と有東式土器・登呂式土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』山梨県考古学協会
- 6 2017 年 7 月 2～4 日現地にて実物を観察させていただいた際の所見である。このほか、財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 1996 『川合遺跡 遺物編 1 平成 3 年度静岡バイパス (川合地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書 (土器・土製品図版編)』の土器図、観察表を参照した。
- 7 前掲註 5 55 頁
- 8 篠原和大 2008 「登呂式土器と雌鹿塚式土器」『静岡県考古学研究』38 登呂式、雌鹿塚式が分布する小地域圏には菊川式土器も混在していることを指摘している。菊川式の影響力の大きさを表しているように思う。
- 9 篠原和大 2012 「登呂の時代の駿河と赤彩土器」『特別展 赤い土器の世界』静岡市立登呂博物館 47-54 頁
- 10 笹沢 浩 1978 「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 11 青木一男 2008 「中部高地型櫛描文系土器群の理解」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5 208 頁
- 12 登呂式の煮沸土器は台付甕で、信州系の平底甕は決して受容しない。信州と駿河では煮沸する対象物に違いがあったことを示唆しているのではないかと。また、私は中期後葉から後期前葉にかけて搬入品の器種が甕に限られている事実は、人の移動に際して調理器具の持ち込みが行われたことを意味していると考え。佐久盆地では栗林式土器に圧着した種実痕分析からコメとともにアワ・キビなどの雑穀栽培も合わせて行われていたことが判明した。これが山梨県にも伝わり、集団が雑穀を甕に入れて携行して静岡平野への移動し、調理を行っていた可能性も考えられる。
- 13 徳永哲秀 2000 「赤彩の文様と時代性」『松原遺跡 弥生総論 7 弥生時代考察・検索』長野県埋蔵文化財センター
- 14 稲森幹大 2012 「登呂式土器の赤彩」『特別展 赤い土器の世界』静岡市立登呂博物館 5-8 頁
- 15 立花 実 2010 「神奈川県西部地域における弥生時代後期の土器様相と中部高地型櫛描文土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』山梨県考古学協会 62-69 頁  
立花 実 2009 「Ⅱ 討論の記録」『南関東の弥生土器 2』関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷遺跡研究会 166 頁
- 16 白居直之 2004 「5. 後家山遺跡出土の曲柄装着鍬について」『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡 I・Ⅲ』佐久市教育委員会
- 17 杉山和徳 2014 「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『久ヶ原・弥生町期の現在』161 頁 杉山が 0・1 期に位置づけた信州の後期前葉の鉄器は、長野市光琳寺裏山・佐久市社宮寺遺跡の鉄斧は中期に、飯田市権現堂前遺跡の鉄鍬と長野市春山 B 遺跡の鉄斧は後期中葉、南箕輪村北高根 A 遺跡の鉄鉋は後期後葉から古墳前期に位置づけられるので、現状後期前葉に位置づけられる弥生後期前葉の鉄器は皆無である。甲斐も杉山の集成中に後期前葉の鉄器はない。信州・甲斐で螺旋状鉄釧や双孔鉄剣が多用されるのは後期中葉以降で、これら鉄製品の受容については、朝光寺原式の分布する東京湾沿岸地域の方が一歩先んじている。
- 18 前掲註 14 32 頁
- 19 平林大樹 2016 「くろがねの腕輪と碧い玉」『佐久考古通信』115 佐久考古学会
- 20 柿沼幹夫の教示。2015 「北川谷遺跡群編年と岩鼻式・吉ヶ谷式土器との編年比較対照」『列島東部における弥生後期の変革』西相模考古学研究会 1 頁では「岩鼻式と朝光寺原式の型的変遷はほぼ同調過程をたどり、」とし、それぞれが分布する比企丘陵と多摩丘陵は弥生時代後期を通じて交流が継続していたとしている。
- 21 前掲註 2 79 頁ではこの 2 地域のほかに東関東系土器が分布する茨城県から千葉県への南下にも注目したが、鈴木素行の教示により、「長岡式」土器は霞ヶ浦周辺に分布し、北へ南へと動くことが分かった。信州系土器の移動とは同じカテゴリーに含めることができないので本稿で訂正しておく。
- 22 馬場伸一郎・遠藤英子 2017 「弥生後期の栗林式土器文化圏における栽培植物」『環境と人類』第 7 号  
遠藤英子 2015 「第 2 節 大豆田遺跡Ⅳ出土蓋型土器残存圧痕のレプリカ法調査」『大豆田遺跡Ⅳ』215-218 頁  
大豆田遺跡Ⅳでは、コメ 3 点に対し、キビ 11 点、アワ 19 点と雑穀主体である。  
岩鼻式土器が出土している和光市午王山遺跡の中期から後期の土器の圧痕はコメと雑穀が相半ばしている。
- 23 浜田晋介 2009 「朝光寺原式土器の編年と相伴土器」『南関東の弥生土器 2』関東弥生時代研究会 埼玉弥生土器観会 八千代栗谷遺跡研究会 65 頁

## 参考文献

- 林幸彦・花岡弘 1983 「弥生時代の炉」『信濃』35-4  
長野県考古学会弥生部会 1999 『長野県弥生土器集成図録』  
加納俊介 石黒立人編 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』  
西相模考古学研究会 2014 『久ヶ原・弥生町期の現在』  
及川良彦 2015 「六 弥生時代住居の種類と構造 第四節道具と生活 第 3 章自然とともに生きた時代」  
『新八王子市志 通史編 1 原始・古代』  
及川良彦 2016 「炉を巡る諸問題 1 石床炉の研究 (1 前編)」『西相模考古』第 26 号 西相模考古学研究